慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦略家ジョージ・ケナンの誕生：戦略思想研究から冷戦戦略へ、一九四六～四七年
Sub Title	George F. Kennan as a strategist: from strategic studies to the cold war strategy, 1946-47
Author	細谷, 雄一(Hosoya, Yuichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.3 (2010. 3) ,p.167- 193
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100328-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦略家ジョージ・ケナンの誕生

——戦略思想研究から冷戦戦略へ、一九四六～四七年——

細谷雄一

はじめに
一　ケナンの戦略思想の形成
　(一)　モスクワからワシントンへ
　(二)　『最終兵器（*The Absolute Weapon*）』
二　『現代戦略の形成者（*Makers of Modern Strategy*）』
　(一)　マキアヴェッリ
　(二)　ジョミニ
　(三)　クラウゼヴィッツ
　(四)　スミス、ハミルトン、リスト
　(五)　エンゲルスとマルクス
おわりに

はじめに

二〇〇五年三月一七日、冷戦初期にアメリカさらには世界を動かした長身の元外交官が永眠した。彼の名は、ジョージ・F・ケナン。彼は二〇世紀のアメリカの外交官として、間違いなく世界で最も広くその名が知られた人物であろう。一九四七年から一九四九年までの冷戦の始まりとして知られるきわめて重要な時期に、アメリカ国務省の政策企画室長（Director of the Policy Planning Staff）として活躍したことは、冷戦史の不可欠な一ページとしてよく知られている。そのケナンは、百歳の誕生日の一年後の一カ月後、そして一日後にその長い人生を終えたのである。彼が仕えたハリー・トルーマン大統領やディーン・アチソン国務長官らは、歴史の遙か彼方にそびえ立っている。ケナンの果たしたその歴史的な功績によって、彼の名は今後も忘却されることはないであろう。

そのケナンの名が広く知られているのは、彼が打ち立てたいわゆる封じ込め戦略（containment strategy）によってであり、さらには『アメリカ外交五〇年』などに代表される彼の著書によってであろう。[1] また彼が果たした冷戦戦略の位置づけ、彼の外交思想、彼の欧州政策、対日政策など、ケナンをめぐる数々の優れた研究が残されている。[2] その豊穣な先行研究の数々によって、彼の人物像と功績については大部分が明らかになっている。

しかしながら、多くの研究者がケナンの実像を資料に基づき浮き彫りにしようとすることについて、彼自らが多少の戸惑いを感じながら次のように記している。「私のこれまでの雑多な著作――国際問題の講義、外交史の本、あるいは大学卒業式の式辞など演説における謎めいた文章――から、一貫した個人的、政治的哲学のようなものを引きだそうと、わざわざ試みる論者が最近何人も出ては、不満や、少なくとも戸惑いを表明している。得るところが少なくて、かえって混迷が深くなることもあったというのである。[3]」ケナンは実に多面的な性質を備

えた、奥行きのある「政治的哲学」を有していたのである。

ケナンほどに数多くの外交史研究者の関心を惹きつけて、数多くの研究者によって研究対象とされ、またそれでも数多くの謎が残るアメリカ外交官は少ないであろう。それだけではない。ケナンの親しい友人であり、著名な歴史家であるジョン・ルカーチはそのケナン評伝の中で次のように述べている。「彼が書き残した著作物は膨大な量であり、それらは短い内容ではなく分厚く、淡泊ではなく濃密で、小規模なものではなく巨大な大きさで、少なくとも不十分というのではなく、おそらく読み尽くすことができないほどのものである。[4]」その膨大な量の先行研究やケナン自らが記した著作物を前にして、これ以上新しい研究を加えることは困難であるようにさえ思えてくる。[5]

とはいえ、いくつかの新しい貢献も依然として可能であろう。というのも、二〇〇五年三月の彼の没後に膨大な量の新しい彼の個人文書が、プリンストン大学図書館所蔵のケナン文書に追加されたからだ。とりわけ彼の日記が加わったことで、彼自らがどのように考え、何を感じ、どのように分析していたかが、より克明に把握できるようになった。その中でも、これまで十分に光が当てられておらず、しかしながら歴史的に重要な意味を持つ時期として、一九四六年四月のモスクワからの帰国後に、ナショナル・ウォー・カレッジで副学校長（deputy commandant for foreign affairs）として、講義の準備のためにも戦略思想を練り上げた期間を指摘できる。この時期のケナンの戦略思想形成の過程を理解することは、冷戦初期のアメリカの対外政策の中で、軍事と政治がどのように連結し、軍事ドクトリンがどのように形成されていったかを認識する上で、大きな意味を持つ。

この時期に関してこれまでの研究では、彼におけるロシア観が熟成された時期として扱われることが多い。とりわけ、一九四六年に「長文電報」をモスクワから送ってから、一九四七年に『フォーリン・アフェアーズ』誌に「X論文」としての「ソ連の行動の源泉」を寄稿して話題を集めるまでの一年間は、純粋に彼の対ロ戦略の表

明の時期として描かれることが通常であった。この時期にケナンがアメリカ各地で、ロシア情勢に関する啓蒙的な講演や著述を繰り返していたためであろう。他方でナショナル・ウォー・カレッジにおける戦略理論に関するケナンの研究教育活動について、これまでに資料を用いて実証的に検証される機会は少なかった。この七カ月間、彼はバーナード・ブローディーが編集した画期的な論文集である『最終兵器（*The Absolute Weapons*）』やエドワード・ミード・アールが編集した戦略理論の古典となる『現代戦略の形成者（*Makers of Modern Strategy*）』を読みながら、自ら軍事戦略と外交戦略との交錯についての思索を深めていた様子が、二〇〇九年三月以降に新たに公開されたケナンの個人文書により明らかになった。(6) その中でもケナンは、対外政策と軍事力がどのような関係にあるべきか、また核兵器の登場によって従来の戦争はどのように変わっていくのかについて、多大な関心を寄せていた軌跡が示されている。

いわば、モスクワから「長文電報」を送った一九四六年二月から、ジョージ・マーシャル国務長官の下で政策企画室長に就任する一九四七年五月に至るこの期間に、彼の中核的な戦略思想が醸成されたといえる。ケナン自らもその回顧録の中で、次のように想起している。「読書をする中で、また著名な外部講師の講義を聴講して、さらには私自身の講義の準備に苦悶しながら、まさにこの時期にアメリカの政策に関するそれ以後の私自身の考え方の基本となるような視点が浮かび上がってきたと、今では思い出すことが出来る。(7)」ナショナル・ウォー・カレッジで講義を行い、また他の講師の講義を聴講するケナンにとって、それは自らの戦略理論を確立する上での不可欠な栄養に溢れた幸福な一年間だったのである。

本稿では、それらの新資料を用いながら、一九四七年春に国務省政策企画室長として新たに冷戦戦略を実践していく基礎となるべく、そこに至る一年間にナショナル・ウォー・カレッジでの講義の準備をする過程で、どのようにして自らの戦略思想を形成していったのか、いわば戦略家ジョージ・ケナンの誕生について検討すること

にしたい。

一　ケナンの戦略思想の形成

(一)　モスクワからワシントンへ

一九四六年一月、代理大使として駐ソ大使館で勤務をしていたケナンはモスクワで不満を鬱屈させていた。彼はアメリカ国務省を代表するロシア専門家であり、モスクワ駐在によって冷徹したロシア分析を醸成させていたが、それとは異なる政治的次元で米ソ関係が構築されていった。

前月の、一九四五年一二月のモスクワで開催された外相理事会では、アメリカ国務長官のジェームズ・バーンズがソ連外相モロトフの巧みな要求の前に譲歩を繰り返し、他方でアメリカ国民は連合国の英雄であるスターリンが指導するソ連との友好関係が、戦後も永続すべきものと確信していた。(8) そのような中でソ連は確実に東欧での勢力圏を固めていき、さらには東地中海やイラン北部でも自らの影響力を拡大していった。イラン北部からのソ連軍撤退をめぐる問題は、一九四六年一月に始まったばかりの国連総会および安全保障理事会での、最初の障害として英米両国政府の前に立ちはだかっていた。ソ連との友好関係の維持という楽観と、現実の地政学的な対立の深刻化という二つの側面が、冷戦の始まりに奇妙な彩りを与えていた。それをモスクワで最も身近に感じていた西側政府の外交官が、アメリカのジョージ・ケナンとイギリスのフランク・ロバーツであった。(9)

そのような中で、一九四六年二月二二日に代理大使のケナンがモスクワから送った電報は、後に「長文電報」として広く知られることになる。それは、彼が詳細にソ連の行動原理を示した画期的な文書であり、その後のアメリカ政府の対ソ政策を大きく揺り動かしていくことになる。その文書でケナンは、ソ連は「道理には鈍感であ

るが、力の論理には高度に敏感である」と、巧みにソ連の対外行動の論理を描き出し、「力の論理」を前提にソ連との交渉を行う必要を説いていた。[10] そしてソ連は、「強い抵抗に遭えば、どんなところでも容易に撤退し得るし、実際にそうしてきた」と論じている。ケナンは、アメリカがその対ソ政策を米ソ友好という漠然として蜃気楼のような絆ではなく、力に基づいて冷徹に構築していく必要を感じていたのである。

このケナンの「長文電報」は、ワシントンで過剰とも言えるほどの化学反応をもたらした。その文書は膨大な数のコピーによってワシントン周辺で閲覧され、とりわけジェームズ・フォレスタル海軍長官を筆頭に、対ソ強硬派の主張を正当化するための論理的根拠を提供した。[11] アメリカがより真剣に戦後の軍事戦略、さらには冷戦戦略を組み立てる必要性を認識させるに至ったのである。ケナン自らが後に回顧するには、「モスクワからの長文電報の成功は、私の人生を変えてしまった」ほどであった。[12]

一九四六年四月、ケナンはモスクワからアメリカの首都ワシントンへと帰国した。ワシントンＤＣの南東部に新設されたナショナル・ウォー・カレッジの教官として、九月の新学期開始へ向けて講義の準備を始めることになったのだ。これを機にケナンは、ポトマック河畔の風光明媚な土地で、自らの思索を体系的にまとめる機会を得た。極寒のモスクワを離れて温かいメリーランドの土地で、週末には農作業もこなすケナンは、とても「健康」であったともいう。それは精神的にも大きな変化であった。それゆえケナンは回顧録の中で、「ウォー・カレッジでの数カ月間は、限りなく心地よいものであった」と記している。[13] この講義の準備のために、ケナンがどのような書物を紐解いていたのか、彼のノートに詳細にその読書記録が綴られている。それでは、ケナンは自らの戦略思想を体系する上で、どのような書物を読んでいたのか、見ていくことにしよう。

〔1〕『最終兵器（*The Absolute Weapon*）』

一九四六年に、将来の米軍を支える幹部を養成するために新たに改編され設立されたナショナル・ウォー・カレッジには、錚々たる講師陣が集められていた。対外政策担当副学長に当たる役職に就いたケナンの同僚は、ハリー・ヒル海軍准将、アルフレッド・グルーエンサー海軍少将、トルーマン・ランドン空軍准将といったアメリカが誇る軍人たちであり、それに加えて、政治学を講じる文民の外部講師としてヴァージニア大学からハーディー・ディラード、イエール大学からシャーマン・ケントとバーナード・ブローディーの二人が参加していた。ケントは諜報活動の研究などでアメリカを代表する知性であり、ブローディーは軍事戦略とりわけ核戦略で当時最も高名な学者であった。ディラード、ケントにブローディー、そしてケナンという贅沢な四人の文民教授によって、戦略論の政治的側面が講じられることになった。このような力の入り方は、海軍長官でありケナンの賛美者であるフォレスタルの情熱によって成り立っているものであった。[14]

ウォー・カレッジの教官に就任してから、ケナンは備忘録として自らの読書や講義の聴講内容などを読書ノートに記録していた。そのノートに最初に記録したものが、カレッジでの尊敬すべき同僚のバーナード・ブローディーの編著であった。それは、核戦略についての重要な研究である『最終兵器（*The Absolute Weapon: Atomic Power and World Order*）』であった。[15] この著書は、イエール大学に所属するブローディー、フレデリック・ダン、アーノルド・ウォルファーズ、パーシー・コルベット、ウィリアム・フォックスの五人によって書かれた核戦略についての論文集であり、核兵器を戦争回避のための抑止力として用いる効用を説いた古典として、その後長らく軍事専門家の間で読み継がれていく。戦後世界で軍事戦略を論じる上でケナンは、核兵器の存在の大きさを注視していたのであろう。その後ケナンは、アメリカの核戦略および核管理について多大な関心を寄せるようになる。[16] その契機ともいうべき、刊行直後のこの著書を入念に読み込んでいるのは興味深い。

ケナンのノートには、「現在の爆弾の破壊力は、一個から十個の爆弾によって世界のいかなる都市も壊滅させ

ることが可能である」と書かれている。[17] ケナンは、ブローディーやウォルファーズが担当する、核戦略の政治的、政策的なインプリケーションに関する章について、多くのコメントを記している。たとえば、バーナード・ブローディーが記した第二章の、「軍事政策へのインプリケーション（The Implication for Military Policy）」について、「これからの任務とは、いかにして戦争に勝利するかではなく、いかにしてそれを回避するかである」と自らの見解を記している。[18] ケナンはブローディーを通じて、核兵器の登場によって軍事政策が大きく質的に変容すべきであり、軍事力を抑止力として第一義的に検討すべき必要性を強く認識するに至った。そして、もはや総力戦が不可能となり、より慎重でより限定的な軍事戦略をアメリカ政府が形成する必要を感じるようになったのである。

ケナンは回顧録の中でも、重要な「二つのコンセプト」について記述している。第一に記すには、「総力戦のドクトリンは、一九世紀と二〇世紀のドクトリンであったということである。われわれは今、一八世紀に広く浸透していた限定戦争のコンセプトへと転換しなければならないであろう。[19]」その根拠となるのは、すでに触れたように、核兵器という「最終兵器」の登場であった。そして「第二のコンセプト」とは、「私がウォー・カレッジの一年間で習得したものであり、これまではとりわけ他では披露してこなかった考えである。」それは何であろうか。すなわち「それは、自らに対して向けられた彼らの使用に対する報復以外には、われわれが原子力兵器を使用することを決して望むべきではないし、またその使用について考えるべきでもない」ということであった。[20]

これは、後に軍事化が進むアメリカ政府の冷戦戦略を彼が嫌悪し、ソ連との対立を前提としながらも、ソ連との戦争の可能性を彼が全力で否定していたことを考えると、示唆に富む記述と言えよう。ケナンにとって、冷戦の時代の軍事戦略とは何よりも、ソ連との全面戦争を回避することを前提に議論が組み立てられていたのである。いかにして戦争を回避するかということこそが、ケナンの戦略論の核心に位置するようになる。それは、その後

ケナンが、アメリカの冷戦戦略が軍事化することを批判し、政治的なリアリズムに基づいてソ連との外交関係を検討していくことにも繋がっていく。

アーノルド・ウォルファーズが記した「米ソ関係における核爆弾（The Atomic Bomb in the Soviet-American Relations）」と題する第三章について、ケナンが情熱的に数々のコメントをノートに記しているのは、その主題からしていわば自然なことであった。[21] 核時代の米ソ関係という問題は、ケナンがモスクワからワシントンに戻ってきてからずっと真摯に考え続けてきたものであった。米ソ関係の専門家として、ケナンはこの章に書かれているウォルファーズの議論に対していくつもの異論を示している。その上で次のような結論を導いている。第一に、「もしもアメリカの都市の数々が地図上から抹殺されてもなお戦い続けるつもりなら、われわれは敗北という可能性を排除することが出来るだろう。[22]」（傍線部は原文から）そして第二に、きわめて重要な見解であるが、「よく計画された総合的な抑止戦略によって、かろうじて成功の可能性が生じるであろう。」

ここでケナンは、「よく計画された総合的な抑止戦略」という言葉を用いている。そしてこの一年後には、彼自らが国務省政策企画室長としてそれを計画し実践することになる。「総合的な抑止戦略」とは、どのようなものであろうか。それは、核兵器や強大な軍事力に過度に依存することなく、アメリカの援助政策や文化外交、さらには道義的な力なども含めた包括的な戦略を意味する。そして後にケナンは、ヨーロッパに対してマーシャル・プランとしての復興支援を計画する一方で、大西洋同盟として軍事力に偏重した戦略を批判していく。

他方で現実主義的なケナンは、原子爆弾の国際管理に楽観的な記述を残すウォルファーズに対して、厳しく批判を加える。ケナンによれば、「ウォルファーズの論文の弱点は、国際管理に対するロシアのアプローチへの彼の分析である」という。というのも、ウォルファーズは、「国家安全保障と秘密主義という現実へのロシアの固執について、理解し損ねている」からだ。ケナンはこのように、アメリカの戦略を考える上でのロシアとの国際

協調の可能性については、これまで指摘されてきたように否定的な認識を抱いていたのである。

二　『現代戦略の形成者（*Makers of Modern Strategy*）』

次にケナンが自らのノートにその読書記録を残しているのは、『現代戦略の形成』である。この論文集は、一九四一年にプリンストン高等研究所とプリンストン大学においてエドワード・ミード・アールが組織したアメリカ対外政策と安全保障問題に関する研究会を出発点としている。[23] そこには「マキアヴェッリからヒトラーまでの軍事思想」を論じた二一の論文が集められており、若きプリンストンの歴史家のゴードン・クレイグとフェリックス・ギルバートによって補佐されて刊行された画期的な研究であった。後にピーター・パレットを編者として新版化されたこの共著は、現代に至るまで戦略論の古典として世界中で広く読まれている。この著書から、ケナンは自らの戦略思想の基礎を吸収したのである。

それではケナンはこの著書でもとりわけ、どの戦略思想家に関心を示したのであろうか。またそれはなぜであろうか。彼がノートに記したコメントを読むと、ケナンならではの注目の仕方をしているのが興味深い。ちなみにケナンが取り上げた戦略思想家は、マキアヴェッリ、フリードリヒ大王、ギュイベール、ビューロー、ジョミニ、クラウゼヴィッツ、アダム・スミス、アレクサンダー・ハミルトン、フリードリヒ・リスト、エンゲルス、マルクス、モルトケ、シュリーフェン、デルブリュック、ブジョー、ガイエニ、リオテ、チャーチル、ロイド＝ジョージ、クレマンソー、ルーデンドルフ、レーニン、トロツキー、スターリン、マジノ、リデル＝ハート、ハウスホーファーなどである。最後にマハンに触れようとして、記述が止まっている。おそらくこの時期になると、精読して十分に分析する時間がなかったのであろう。

後の歴史に最も大きな影響を及ぼしたクラウゼヴィッツの戦略理論の分析に多くの紙幅を割いたことは十分に理解可能であろう。だが、おそらく他の読者であればそれほど力を入れないであろうスミス、ハミルトン、リストに多くのコメントを残していることは興味深い。そこから、ケナンが「軍事力の経済的基礎」に多大な関心を寄せていたことが理解できる。これは、政策企画室長として、そして外交評論家としてのケナンの後の議論を理解するための重要な伏線となっている。彼にとって軍事力とは、国家の戦略全体を考える上での一部分に過ぎず、彼は経済力や道徳などを視野に入れた総合的な政策の中でそれを実践する重要性を理解していたのである。また後に詳しく触れるように、彼がジョミニの戦略論に多くを共感しているのも、ケナンの戦略思想を考える上で大きな鍵となる。他方で、エンゲルスとマルクスの戦略思想についての章に多くのコメントを記していることから、この時期にケナンがソ連共産主義の軍事戦略をより深く理解しようと貪欲になっていたことが理解できる。同時に、エンゲルスが後の総力戦に繋がるような思想的基礎を提供したことにも、ケナンは注目している。これらの点を中心として、もう少し詳しく見ていこう。

(一) マキアヴェッリ

まずケナンは、フェリックス・ギルバートの記したマキアヴェッリの章から、読書記録を書き始めている。冒頭にケナンは、次のように記す。「形式主義やロマン主義を退けながら、そしてあらゆる政治的および軍事的な手段をそれ自体が正当化する、目的としての勝利に焦点を当てながら、いかにしてM（マキアヴェッリ―引用者註）が全体主義的なかたちで、現実主義的に戦争を観察した最初の人物であるかが、示されている」と書いている。[24]

ケナンは、リアリストとしてのカテゴリーに入れられることが多い中、マキアヴェッリのような戦争観には違

和感を抱いているようであった。それゆえ彼の日記の中でも、次のような有名なパスカルの言葉を引用している。すなわち、「力に基づかない正義は無力である。正義に基づかない力は暴力である。われわれは、正義と力と結びつけておかなければならない。」実際にケナンは後になって、対外政策と道徳との関係を数多くの講演や論文の中で扱うことになる。[25] ケナンは、たとえロシアがマキアヴェッリの戦略思想に従って、軍事的な挑発を行ってきたとしても、アメリカは核兵器という非道徳的「最終兵器」を用いるべきではなく、核時代の総力戦はきわめて非道徳的であると考えていたのである。

そのようなケナンにおける道徳観は、戦争によって廃墟と化したハンブルグを訪れた際に彼が抱いた次のような感慨によって支えられていた。彼の回顧録で次のように記されている。「もし西側が、自ら主張する高度の道義的出発点――神がつくられた人間への共感と理解、人間だけでなく神がつくり配慮したその他のものにも表れている共感と理解――を本当に立証しようとするのなら、戦争を軍事的にだけでなく道義的にも戦うべきで、さもなければ戦ってはならぬと、悟るべきだ。なぜならば道義の原則が西側の強さの一部になっているからだ。この強さを失えば、西側はもはや西側ではなく、その勝利は真の勝利ではないだろう。[26]」それは、マキアヴェッリとは大きく異なる戦争観といえる。総力戦の時代に、凄惨な戦争の被害を直接眺めてきたケナンにとって、道徳性を無視した戦略理論を考慮することは困難であった。だからこそ、「最終兵器」を用いて人類を殲滅しようとするような戦略は、とても受け入れることが出来なかったのである。

(二) ジョミニ

ケナンは、フリードリッヒ大王の戦略に触れてから、その次にはスイス出身の高名な戦略家アントワーヌ＝アンリ・ジョミニの戦略を分析している。ジョミニはクラウゼヴィッツと同時代人であるが、プロイセン人のクラ

ウゼヴィッツとは大きく異なる戦略論を説いていた。ジョミニはナポレオンの下で、さらに後にはロシアのアレクサンドル一世やニコライ一世の下で幕僚として活躍した。ケナンは明らかに、ジョミニの戦略に好感を抱いたようである。次のように彼は日記に記す。「クラウゼヴィッツが敵の兵力の壊滅を主張していた」のに対して、ジョミニは「戦争における中心的な問題」として、「敵が退却できるような選択肢を残存させておくような、作戦の防衛線の正確な選択」を考えていた。ケナンによれば、これは「ロシアに対する政治戦略として道徳的である。[27]」というのも「われわれの目的は総力戦ではないし、そうすべきでもないから、ジョミニの議論はより好ましいものである。」これはいうまでもなく、後に触れるクラウゼヴィッツと比較した上でのことである。

興味深いのは、ケナンがこれらの古典的な戦略思想を彼の時代の対ソ戦略と結びつけて考えていたことである。彼が古典的な戦略理論を学ぶ大きな理由も、まさにそこにあった。次のようにケナンは記している。「ソヴィエト政府が不利な状況での戦闘をせざるをえなくなるか（つまりそれを実行することは決してないはずだが）、あるいは退却せざるをえなくなるように、われわれの戦略的な準備を計画し実行することが、われわれの任務である。このようにすることで、ロシアがこのゲームを諦めるようになるまでわれわれはソヴィエトの力を封じ込めることが出来るのだ。[28]」このようにジョミニの戦略思想についてのジョン・シャイの論文を読みながら、ケナンは自らの対ソ封じ込め戦略の理論を固めていった。「長文電報」の中で漠然と吐露していた彼のロシア観が、確固たる古典的な戦略理論と結びつくことで、強靱な骨格をつくっていったのだ。

ちなみにケナンはジョミニの合理的な知性に対して強い愛着を抱いているようである。それはケナンの次の言葉によっても理解できる。「彼自らを、一八世紀の合理主義的な思考から切り離すことはできない。それはルソーではなく、モンテスキューに象徴されるものである。欠陥のない完全な世界ではなく、より静かな世界への希求をモンテスキュー同様に『もっていた』。ビスマルクに至るまでの、ヴォルテールの時代の最後の代表者。彼

の強い愛情は実際には、そのロマン主義的な傾向ゆえに彼が怖れていたナポレオンではなく、フリードリヒに向けられていた。[29]」ロシアの文豪チェーホフをこよなく愛する文学的な嗜好を持ち、また後に歴史家として優れた書物を記すことになるケナンは、古典的な戦略思想を吸収する際にも対象とするその人物の人間性に至るまで鋭く観察していたのである。「文学と同じく歴史においても人間の描写が大切であるということである。[30]」また「モンテスキューに象徴され」、「ヴォルテールの時代」とケナンが呼ぶものは、すなわち人間が理性によって判断するような啓蒙的で合理的な精神が支配していた「一八世紀」を意味する。それは、ケナンがいうところの、「一九世紀と二〇世紀」という「総力戦のドクトリン」が支配する時代とは異なるものである。「最終兵器」としての核兵器が開発された第二次世界大戦後の世界では、「一八世紀に広く浸透していた限定戦争のコンセプト」こそが、あるべき戦争論と考えていた。その意味において、ケナンはジョミニの戦略思想に強い愛着を示したのである。

㈢ クラウゼヴィッツ

それでは、ジョミニの同時代人でありプロイセンを代表する戦略思想家であったクラウゼヴィッツについて、ケナンはどのような印象を得たのであろうか。ジョミニに続いてケナンはクラウゼヴィッツについての章を読み、数多くの感想を自らのノートに記録している。彼がクラウゼヴィッツとどのように対峙し、どのようにそれを吸収し、どのようにそれを自らの戦略思想の中に組み入れていったのかを理解することは、ケナンの戦略思想を理解する上でもとても大きな意味を持つ。とりわけ、クラウゼヴィッツの思想に強い印象を受けると同時に、それに対して少なからぬ違和感を抱いたケナンが、どのようにその巨大な思想と向かい合ったのだろうか。

ケナンは次のような言葉から、クラウゼヴィッツの戦略思想についての章の読後感を書き始めている。[31]「クラ

ウゼヴィッツはまさに、戦争のファンダメンタルズを最初に把握した人物。プロイセン主義、つまりは『戦闘マニア』の時代のエキスパート。」ケナンは、クラウゼヴィッツと同時代人のジョミニが体現していたような、「一八世紀的」な合理主義の精神を受け継いだ限定戦争論としての戦略思想と、クラウゼヴィッツが体現していたような、相手を殲滅させる「一九世紀的」な総力戦としての戦略思想を対置させて考えていた。その上で、核兵器が登場した以上もはや「一九世紀的」に相手を殲滅させる戦争論が時代に不適合となったとみなしていた。ケナンは次のように書く。「原子力兵器の持つ意味とは、もしもわれわれが相互の殲滅を回避したければ、一八世紀的な戦略的な政治思考へと回帰しなければならない、ということではないだろうか。」とすれば、「相手兵力の完全なる殲滅は、もはやわれわれの目的とはなりえない」のだろう。

相手を殲滅させることを戦争の重要な目的に掲げるクラウゼヴィッツに違和感を抱きながらも、ケナンはその戦略思想に多大な関心を寄せているようである。たとえば、クラウゼヴィッツの戦略論の重要な核心でもあるが、「戦略家の中核的な課題とは、重心（center of gravity）を見いだすことである」とケナンは記している。[32] 攻撃対象の核となるその「重心」とは、「陸軍であるかもしれないし、首都であるかもしれないし、同盟諸国間での共通の利益かもしれないし、『世論』であるかもしれない。」いかなる「重心」を攻撃するかによって、戦争の帰結は大きく左右されるであろう。その「重心」を見いだすことは容易ではないが、ケナンは米ソ間の冷戦において何がその戦略の「重心」となっているのかを、次第に模索するようになっていく。

続いてケナンは、クラウゼヴィッツのさらに核心的な戦略理論へと向き合っていった。それは、政策と軍事力との関係である。そもそも外交官として外交政策を組み立てる立場にあったケナンにとって、対外政策と軍事力との関係性を検討することこそが、ナショナル・ウォー・カレッジでの重要な研究課題であった。ケナン自らがその「長文電報」で記したような「力の論理には高度に敏感である」ロシアに対して、アメリカは外交と軍事的

な威嚇を組み合わせて、向かい合わなければならなかった。それはまた、戦略理論の核心にも関わる問題であった。ケナンは次のように記す。「対外政策の目標こそがその目的であって、戦争とは手段である。戦争とは、『他の多様な手段と混ざり合った、政治的な対処の継続（a continuation of political transactions, intermingled with different means）』である。[33]」（傍線部は原文から）

「政治的な対処の継続」というクラウゼヴィッツの言葉の中に、ケナンは自らの戦略思想の重要な基礎を見いだした。すなわち、軍事戦略が政治的考慮から切り離されて自立的に展開していくことを防ぎ、あくまでも対外政策が主導してアメリカの軍事戦略の方向性を固めていく必要を感じたのである。それゆえに後のシカゴ大学での講演でも、ケナンは次のように述べている。「われわれは政治的要因をなおざりにして軍事的要因を誇張する傾向があり、結果としてわれわれの対応を過度に軍事的なものにしてしまう。[34]」

そのような思考を固めていく上で、この時期のケナンの読書は重要な意味を持っていた。それゆえにケナンは晩年に刊行したその著書の中でクラウゼヴィッツに触れて、「紛争の力学と、戦争における政治と軍事の利害の相互作用に関する彼の考察は、書かれてから一六〇年以上この方、今日性と有効性を失わずに来た」と評価している。[35] このようにして、ケナンは真剣にクラウゼヴィッツの古典的な戦争論と対峙することで、多くの栄養を吸収し自らの戦略思想を構築していったのである。

㈣ スミス、ハミルトン、リスト

次にケナンが紙幅を割いて感想を記述しているのが、アダム・スミス、アレクサンダー・ハミルトン、そしてフリードリヒ・リストの三人を取り上げたエドワード・ミード・アールの章である。この章では、「軍事力の経済的基礎」が語られている。冷戦初期の重要な戦略の一環としてマーシャル・プランとしての経済復興計画を考

案したケナンが、この問題に敏感に関心を示したことは興味深い。

ケナンはまず冒頭で、執筆者のアールの次のような言葉を書き写している。「重商主義的な体制の中では戦争はその一部となっており、そこでは国力それ自体が目的となり、政治的目的のために経済生活が動員されるようなあらゆる体制においてもそうである。」[36] そしてさらにはアダム・スミスについて、次のように言及している。「その濫用については批判しているが、スミスは重商主義的な体制の基礎を根底から否定していたわけではない。」ケナンは、軍事的な目的のために国家が一定程度、経済的基礎を動員する必要を否定していなかった。他方で、リストのように過度な重商主義の信奉者に対しては、違和感を隠さなかった。ケナンによればリストは「国力に過度に傾斜した、対外政策におけるナチスの学派」の「最初の人物」であるという。それは「イングランドに対する極端な嫉妬」から来るものと喝破し、イングランドへの「愛憎関係」が見られるという。「そして生前に彼のアイデアが実現したのは、関税同盟（*Zollverein*）のみである」と厳しい。

ケナンは基本的には、自由経済体制を嗜好し、リベラルな経済思想を好んでいた。しかし同時に、重商主義的な発想で国家が経済力を政治的な目的のために動員することに対して、その必要性を認めていた。冷戦初期においても、西側諸国は一定程度、重商主義的にその経済力を結束させて、工業力を政治的目的のために活用しなければならない。その二つの組み合わせによって、国家がより実効的な対外政策を実現できるとケナンは考えたのではないだろうか。そのような戦略思想の政策的帰結が、一九四七年六月に発表される戦後欧州復興支援のためのマーシャル・プランであった。

㈤ エンゲルスとマルクス

その次の章は、ドイツ出身の政治学者ジグマンド・ノイマンが執筆した、エンゲルスとマルクスの戦略思想で

ある。この二人は、『共産党宣言』や『ドイツ・イデオロギー』などの著書で知られる社会思想家であって、これまで一般的に戦争論や戦略思想の文脈で語られることは少なかった。しかしケナンは、このノイマンによって書かれた章を読み、「著者は彼らのことを、近代の総力戦の父だと正しく考えている」と記している。[37] というのも彼らは、「革命と戦争の結びつき」を意識していたからである。それはどういうことであろうか。

ケナンが読むところによれば、マルクスよりもエンゲルスの方が、その点において戦争論を明確に語っているという。というのも、「構造的な思考をする思想家であり、より優れた政治戦略家であるマルクス」とは異なり、「エンゲルスは生まれつきの兵士であり戦士であった」からだ。そしてエンゲルスは、「ほかのいかなる主題よりも、軍事科学についてより多く書いている」という。確かに『共産党宣言』などのエンゲルスの著作の中には、暴力を語る文章が少なからず含まれている。どのように政治的な目的を達成するか、暴力を含めたその方法についての戦略を語るエンゲルスは、確かにケナンがノートに記しているように、「革命と戦争の結びつき」を重要視していた。

エンゲルスとマルクスの議論の中に見いだすことの出来る「軍事思想における三つの段階」について、ケナンはノートに詳細に記録している。第一の段階とは、「（一八）五〇年代および六〇年代の、大国の軍事戦略の考究」である。「過去の数々の敗北を検証する」中で、エンゲルスとマルクスは、「農夫達の入隊への協力があるかないかに全てがかかっていた」という。それは、第二の段階と大きく関係する問題である。すなわちそれは、「国民的な紐帯の発見」である。言い換えれば、「重要性が増していく、国民性への理解」が重要となっているという。そしてそれは、第三の段階へと繋がっていく。つまりは、「革命国家への接近」、あるいは「民主的軍隊の理解」である。「民主化された軍隊として徴兵を容認する」ことが、それと並行して進められる。「総動員」と結びつき、また「『武装された国民』と未来への希望が与えられた社会主義」が同一視されていくのである。

ケナンは、「エンゲルスの中の、シラーのロマン主義的なナショナリズムとヘーゲルとの連関」を見いだした。それは、「典型的な一九世紀的なロマン主義的なリベラル」であるという。ここでも、すでにジェミニやクラウゼヴィッツのところでみたような、一九世紀に「総力戦」と「総動員」が「ロマン主義的なナショナリズム」あるいは「国民的な紐帯の発見」によって発展していく様子への、ケナンの嫌悪感が示されている。近代化され、全体主義化され、総動員されていくナショナリズムの巨大な奔流に、ケナンは逆らおうとしていた。そのためには一八世紀的な合理主義の世界観へと回帰すべきだと、ケナンは考えていた。

続けてケナンは、そのようなエンゲルスとマルクスの革命思想を契機として、彼の戦略思想の核心に関わる重要な問題領域へと進んでいった。それは「戦争の手段（Measures of War）」と「戦争に至らない手段（Measures Short of War）」の二つの区別である。ケナンはまず、軍事力行使の問題について、「平和的手段（Measures of Peace）」と「戦争の手段（Measures of War）」との二つに区分している。その上で、「戦争の手段」をより詳しく分類し、「戦争に至らない手段」と「暴力による手段（Measures of Violence）」を分けて考えている。この二つは、「好戦的、および平和的な手段」とに分けられる。ケナンは、「なぜこの分類が、現在においてより効果的であるのか」と自問している。それにケナンは次のように答える。「なぜならば、主要な国家の戦略は実効的であるために、単に暴力の領域のみに関連づけられるべきではなく、他の領域にもまた関連づけられるべき」だからだ。

ここまできて、もはやケナンの議論はエンゲルスやマルクスとの関連性からだいぶ乖離してしまっている。ケナンの関心の焦点は、ソ連との緊張状態の中でいかにしてアメリカの対外政策を組み立てるかという同時代的なものであった。そして、すでにこれまで見てきたように、ケナンはソ連との冷戦を戦う上で、「戦争に至らない手段」の有用性と、「他の領域にもまた関連づけられるべき」重要性を指摘している。「単に暴力の領域のみに関

連づけられる」ような「戦争の手段」に対しては、ケナンは警鐘を鳴らしているのである。

その上でケナンは戦争について、次のように二つに区分している。それは第一が「殲滅させるための戦争」であり、第二が「限定的な目的の戦争」である。ケナンは明らかに、後者をより好ましいものと認識し、それゆえに「戦争に至らない手段」の重要性を主張する。彼は次のようにも記している。「この講義において私は、暴力に至らない行動について扱う必要があるだろう。しかし私はそれを、戦争に至らない行動と呼ぶのに反対である。なぜならばそれはあらゆる点で、意図としても結果としても、大砲や空襲のような戦争と同様の行動であるからだ。[38]」忍耐強い封じ込め政策は、ケナンにとって、「大砲や空襲のような戦争」と同じような効果があるはずであった。

このケナンの言葉の中に、ケナンが後に政策企画室長としてつくりあげていくアメリカの冷戦戦略の本質が隠されており、同時に冷戦が「熱戦」ではなく「冷戦」に止まる根拠の本質が隠されている。「戦争に至らない行動」としての「限定的な目的の戦争」こそが、冷戦の性質を示す最良の表現であろう。それはケナンが数々の古典的な戦争論に触れる中で、意図して設計した戦略思想であった。ナショナル・ウォー・カレッジでの講義の準備と講義や講演の活動において、ケナンは自らの冷戦戦略の論理を組み立てていった。ちなみに一九四六年九月一六日のナショナル・ウォー・カレッジでの講演でケナンは、「戦争に至らない手段（外交）（Measures Short of War (Diplomatic)）」という題目でこの戦略理論を詳しく語っている。[39]そこでケナンは、アメリカにとって重要な問題とは、「政治的、経済的、そして道徳的な力の問題」であると論じている。[40]

これ以降も、ケナンのノートにはルーデンドフルやレーニンなど、戦略思想についての興味深い分析がなされているが、次第に書き残すメモの分量も減っていき、またそれらはそれほど彼自身に鮮烈な影響を与えてはいないようであった。それは彼自身が次第に多忙となっていったことで、時間をかけてこのテキストを読むことが困

難になっていったからかもしれない。同時に、すでに見てきたように、ケナンの読書ノートの中では同じような問題意識が繰り返し表出している。それはつまり、すでにこのテキストの半ば辺りで彼自らの戦略思想の骨格が確立されていったことを意味するのかもしれない。また彼のノートの後半部分では、ナショナル・ウォー・カレッジでの他の教官の講義を聴講し、それをメモしている様子がうかがえる。貪欲に新しい知識を吸収し栄養分を欲する彼の姿勢が、そこには示されている。

ナショナル・ウォー・カレッジでの日々は、彼にとってはじめて教育機関で学ぶことの喜びを得た期間であった。新たな知的刺激に感激し、それを最大限に活用したのである。彼は自らの回顧録で、プリンストン大学での学生時代に自らが「覚醒するようなことはなかった」と記している。[41] プリンストンでは、「入学したとき同様に、目立たないまま卒業した」のである。[42] ジョン・ルカーチによれば、「彼はプリンストンでは幸福ではなかった」のである。他方でケナンは回顧録の中で、ナショナル・ウォー・カレッジでの月日が「限りなく心地よいものであった」と想起している。[43] 貪欲に学ぶその姿勢は、教官の姿勢というよりもまるで学生のそれである。その翌年には、ケナンには初代政策企画室長という重職が待っていた。彼が醸成したその戦略思想が、実際のアメリカの対外政策として実践されることによって、彼は時代を動かした外交官として記憶されるのである。それはあくまでも、すでに見てきたような、確固たる戦略思想に支えられたものであったのだ。

おわりに

晩年のケナンは、その著書の中で次のように述べている。「健全な軍事戦略理論を練り上げ、これを国民国家の他の関心事と関連づけるという努力は、たいていの大国にとって難しい問題だったようである。だが米国ほど、

それに満足な解答を見いだせないできた国はないと私は思う。確立し権威ある指導原理が何もないのがこの分野である。[44]」それまで十分に学問として確立しておらず、「権威ある指導原理が何もない」ゆえに、ケナンは自ら古典的な戦略思想を学ぶことで、それに対する答えを模索していたのである。[45]

そのような「難しい問題」を考える上で、ケナンは一九四六年春から一年間、ナショナル・ウォー・カレッジの教官として豊穣な時間を過ごすことになった。ケナンはそこで、数々の古典的な戦略思想に触れることで、自らの冷戦戦略の骨格となる論理を構築していった。たとえば、彼はジョミニの戦略思想から、「一八世紀に広く浸透していた限定戦争のコンセプト」を学び取った。また「他の多様な手段と混ざり合った、政治的な対処」としての総合的な戦略の必要性を、彼はクラウゼヴィッツから学んだ。またエンゲルスの戦略思想から、現代世界ではナショナリズムが「国民的な紐帯」を強めていき、「民主化された軍隊」が国民としての「総力戦」思想に繋がっていく意味を学んだ。そして、冷戦という対立的状況の中での「戦争に至らない手段」を活用する重要性を認識し、「限定的な目的の戦争」の有用性を認識した。これらの多様な戦略思想がケナンの中で融合し、戦略家ケナンが誕生したのである。そしてケナンは、一つの結論を導いた。すなわち、「われわれの軍事力の最大の価値とは、抑止力としてのその性質にあるのだ。[46]」ケナンにとっての冷戦戦略の本質とは、アメリカの強大な軍事力を抑止力として活用し、「総力戦」を回避することにあったのだ。

一九四七年春にケナンが国務省政策企画室長となってから、彼がそれまでの一年間で学んだ古典的な戦略思想が彼の政策計画と結合し、アメリカの冷戦戦略の枠組みを形づくっていった。冷戦の歴史の巨大な時間の中で彼が果たした役割を理解する上で、戦略家としてのケナンの存立する基盤を検討することによって、アメリカがどのように対外政策を構築し、どのような戦後世界を確立していったのか、その一面をより深く認識することができるのであろう。それゆえに、彼自身が「限りなく心地よいものであった」と回顧するナショナル・ウォー・カ

レッジでの彼の思索の過程をたどることは、大きな意味を持つのではないか。

(1) ケナンの冷戦戦略を中心に論じた、封じ込め戦略に関する最も優れた通史的研究は、依然として、John Lewis Gaddis, *Strategies of Containment: A Critical Appraisal of American National Security Policy during the Cold War*, revised and expanded edition (Oxford: Oxford University Press, 2005) である。また邦語でも、佐々木卓也『封じ込めの形成と変容—ケナン、アチソン、ニッツェとトルーマン政権の冷戦戦略』(三嶺書房、一九九三年) は、本論文が対象とする時期を含め、ケナンの戦略を詳細に検討した優れた研究である。また彼の主著である「アメリカ外交」については、ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交五〇年』近藤晋一・飯田藤次・有賀貞訳 (岩波現代文庫、二〇〇〇年) の訳文を参照。

(2) ジョージ・ケナンについての主要な伝記的な研究としては、以下のものを参照。David Mayers, *George F. Kennan and the Dilemmas of US Foreign Policy* (New York: Oxford University Press, 1988); Walter L. Hixon, *George F. Kennan: Cold War Iconoclast* (New York: Columbia University Press, 1989); Anders Stephenson, *Kennan and the Art of Foreign Policy* (Cambridge: Harvard University Press, 1989); Wilson D. Miscamble, *George F. Kennan and the Making of American Foreign Policy, 1947–1950* (Princeton: Princeton University Press, 1992); Richard L. Russell, *George F. Kennan's Strategic Thought: the Making of American Political Realist* (London: Praeger, 1999). また彼の欧州政策については、John Lamberton Harper, *American Visions of Europe: Franklin D. Roosevelt, George F. Kennan and Dean G. Acheson* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), 彼の対日政策については、五十嵐武士『戦後日米関係の形成—講和・安保と冷戦後の視点に立って』(講談社学術文庫、一九九五年) および楠綾子『吉田茂の安全保障政策の形成—日米の構想とその相互作用　１９４３～１９５２年』(ミネルヴァ書房、二〇〇九年) が優れている。

(3) George F. Kennan, *Around the Cragged Hill: A Personal and Political Philosophy* (New York: Norton, 1993); 邦訳、ジョージ・ケナン『二十世紀を生きて—ある個人と政治の哲学』関元訳 (同文書院インターナショナル、一九九四年) ii—iii頁。

(4) John Lukacs, *George Kennan: A Study of Character* (New Haven: Yale University Press, 2007) p.3.

(5) ジョージ・ケナンの評伝としては、イエール大学教授の歴史家ジョン・ルイス・ギャディスが、詳細な著書の刊行を準備しており、そのための資料もまたプリンストン大学図書館のケナン文書の一部として所蔵されている。二〇〇九年八月の時点で、依然として刊行はなされていない。

(6) George F. Kennan Diaries, 1946, Kennan Papers, MC076, Box 231, Folder 14, Seeley G. Mudd Manuscript Library, Princeton University Library; Peter Paret (ed.), *Makers of Modern Strategy from Machiavelli to the Nuclear Age* (Oxford: Oxford University Press, 1986); George F. Kennan, *Memoirs 1925–1950* (New York: Random House, 1967), p.308. ケナンが手にしたオリジナルの著書は、一九四一年にプリンストン大学とプリンストン高等研究所において行われたセミナー・シリーズをもとにして刊行された、同名の著書である。Edward Mead Earle (ed.), *Makers of Modern Strategy* (Princeton: Princeton University Press, 1943); Peter Paret, "Introduction", in his *Makers of Modern Strategy*, p.4. 一九八六年に刊行された新版は、これに冷戦期の戦略についての章を加えて刊行された改訂版である。

(7) Kennan, *Memoirs*, p.309.

(8) 細谷雄一『戦後国際秩序とイギリス外交―戦後ヨーロッパの形成　一九四五～五一年』（創文社、二〇〇一年）第一章。

(9) この二人の外交官の関係を冷戦の起源と重ねて論じた研究として、細谷雄一「ヨーロッパ冷戦の起源、一九四五年―四六年―英ソ関係とイデオロギー対立の発展」『法学政治学論究』四二号、一九九九年、三七一―四一五頁、および同「冷戦の扉を開けた外交官たち―ジョージ・F・ケナンとフランク・ロバーツ」『外交フォーラム』二〇〇六年二月号、三四―三九頁を参照。

(10) George F. Kennan to James Byrnes, February 22, 1946, *Foreign Relations of the United States, 1946, Volume VI*, pp.696–709; 佐々木『封じ込めの形成と変容』五七―五八頁。

(11) フォレスタル長官が、どのようにケナンの「長文電報」を受け止めたかについては、村田晃嗣『米国初代国防長官フォレスタル―冷戦の闘士はなぜ自殺したのか』（中央公論社、一九九七年）が詳しい。

(12) Kennan, *Memoirs*, p.298.
(13) Ibid., p.304.
(14) Ibid., p.306.
(15) Kennan Diary, n.d., 1946, p.5, Kennan Papers, Box 231, Folder 14; Bernard Brodie, *The Absolute Weapon: Atomic Power and World Order* (New York: Harcout, 1946).
(16) この問題について、後にケナンは一冊の著書にまとめ、自らの見解を示している。George F. Kennan, *The Nuclear Delusion: the Soviet-American Relations in the Atomic Age* (New York: Pantheon Books, 1982). 邦訳は『核の妄想』佐々木担・佐々木文子訳（社会思想社、一九八四年）参照。
(17) Kennan Diary, n.d., 1946, pp.5-6, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(18) Kennan Diary, n.d., 1946, p.7, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(19) Kennan, *Memoirs*, p.310.
(20) Ibid., p.311.
(21) Kennan Diary, n.d., 1946, pp.9-14, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(22) Kennan Diary, n.d., 1946, p.13, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(23) Earle, "Introduction" in Earle (ed.), *Makers of Modern Strategy*, p.viii; Paret, "Introduction", in his *Makers of Modern Strategy*, p.4.
(24) Kennan Diary, n.d., 1946, p.17, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(25) たとえばそれが直接論じられた論文として、George F. Kennan, "Morality and Foreign Policy (1985)", in his *At a Century's Ending: Reflections, 1982-1995* (New York: Norton, 1996) pp.169-282, originally published in *Foreign Affairs* (Winter 1985-86) を参照。
(26) Kennan, *Memoirs*, p.437; ケナン『二〇世紀を生きて』三五六—三五七頁。
(27) Kennan Diary, n.d., 1946, p.20, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(28) Ibid., pp.20-1.

(29) Ibid., p.21.

(30) この点について、細谷千博も次のように同様の観察をしている。すなわち、ケナンには「歴史における個人の主体性という問題への関心と結びつくところがあったように思われる」という。「さらにいうと、歴史の荒浪に翻弄されながら必死になって小舟の舵にすがっている可憐な人間の姿、また歴史の事件の渦中にまきこまれた政治家、外交官の相互の関係から織り出されていく複雑で微妙な人間模様を、歴史の叙述を通して描き出そうとする欲求がそこに働いていたのではなかったか。かくてケナンにおいて、歴史は文学の領域へと近づいてゆく。」細谷千博「歴史家としてのジョージ・ケナン」細谷千博『日本外交の座標』（中央公論社、一九七九年）所収、一七四頁。

(31) 古典的な戦略思想を論じる上でクラウゼヴィッツはその中核に位置するが、一九四三年のアールの初版ではハンス・ロスフェルスがその章を担当している。一九八六年の第二版では編者のピーター・パレットがこの章を担当している。ケナンが読んだのは、この初版のロスフェルスによる章である。Hans Rothfels, “Clausewitz”, in Earle (ed.), *Makers of Modern Strategy*, pp.93–113; Peter Paret, “Clausewitz”, in Paret (ed.), *Makers of Modern Strategy*, pp.186–213. なおロスフェルスは、ドイツに生まれ第一次世界大戦ではドイツ陸軍にて従軍した経験を持つ研究者で、ベルリン大学やケーニヒスベルク大学で歴史を講じてきたクラウゼヴィッツの専門家であったが、ユダヤ人であることからイギリス、そして後にはアメリカに亡命した。そのような中でこの論文は書かれている。他方で、同じくドイツ出身であるが、ロンドン大学キングス・コレッジでマイケル・ハワードの下で戦争史を学んだパレットはハワードの影響からも、よりアングロ＝サクソン的なクラウゼヴィッツ理解をしていると言える。その点は、パレットがハワードと共訳し解説も加えているクラウゼヴィッツ『戦争論』に詳しい。Carl von Clausewitz, *On War*, translated and edited by Michael Howard and Peter Paret, revised edition (Princeton: Princeton University Press, 1984). また、アングロ＝サクソンにおけるクラウゼヴィッツ受容の過程についての優れた研究書として、Christopher Bassford, *Clausewitz in English: Reception of Clausewitz in Britain and America, 1815–1945* (Oxford: Oxford University Press, 1994) を参照。この著書でも、ロスフェルス、ハワード、パレットこそが戦後のイギリスやアメリカにおける、最も優れたクラウゼヴィッツの紹介者と指摘されている。Bassford, *Clausewitz in English*, Chapter 21 を参照。

(32) Kennan Diary, n.d., 1946, p.23, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(33) Ibid., p.24. この有名なクラウゼヴィッツからの引用は、翻訳によって異なる文章となっている。邦訳ではこの部分は、篠田英雄訳『戦争論』(岩波文庫、一九六八年)の「戦争とは他の手段をもってする政治の延長」という訳文が、広く浸透している。新たに日本クラウゼヴィッツ学会訳『レクラム版・戦争論』(芙蓉書房、二〇〇一年)がより慎重な翻訳に基づいて刊行されている。
(34) ケナン『アメリカ外交五〇年』二六五—二六六頁。
(35) ケナン『二〇世紀に生きて』三四四頁。
(36) Kennan Diary, n.d., 1946, p.27, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(37) Kennan Diary, n.d., 1946, p.29, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(38) Kennan Diary, n.d., 1946, p.33, Kennan Papers, Box 231, Folder 14.
(39) Kennan's Speech at the National War College, "Measures Short of War (Diplomatic)", September 16, 1946, Kennan Papers, Box 298, Folder 12.
(40) Ibid.; 佐々木『封じ込めの形成と変容』六二頁。
(41) Kennan, *Memoirs*, p.16.
(42) Lukacs, *George Kennan*, p.17.
(43) Kennan, *Memoirs*, p.298.
(44) ケナン『二〇世紀を生きて』三四三頁。
(45) Kennan, *Memoirs*, p.308.
(46) Ibid., p.312.